

張天虹 著

『中晚唐五代的河朔藩鎮与社会流動』

(北京、社会科学文献出版社、二〇二一年三月、五二〇頁、一二八元)

一

日本における唐代藩鎮研究は斜陽である。戦後、時代区分論争とそれに対する反動の中で盛んに議論された藩鎮体制は、二一世紀に入ってから以後、殆ど学界から関心を示されなくなった。ところが二〇一〇年代以降、中国の学界では藩鎮を主題とした著作が激増した。代表的なものだけでも、張達志『唐代后期藩鎮与州之關係研究』(北京、中国社会科学出版、二〇一一年)、馮金忠『唐代河北藩鎮研究』(北京、科学出版社、二〇一二年)、李碧妍『危機与重構——唐帝国及其地方諸侯』(北京、北京師範大学出版社、二〇一五年)、仇鹿鳴『長安与河北之間——中晚唐期的政治与文化』(北京、北京師範大学出版社、二〇一八年)等が挙げられる。この群雄割拠ともいふべき状況に「社会流動」という観点から切り込んだのが、本書「張天虹(著)『中晚唐五代的河朔藩鎮与社会流動』」である。

新 見 まどか

著者の張天虹氏は一九七九年生まれ、二〇〇八年に清華大学で歴史学の博士号を取得され、その年から首都師範大学歴史学院で教鞭を採り、現在同大学の副教授である。また、台北中央研究院歴史語言研究所や香港浸会大学、シンガポール南洋理工大学中華語言文化センターでの在外研究の経験を有す。そのため本書には、中文のみならず英語・日本語の研究も多く引用されている。

本書の表題にある「社会流動」とは、社会階層が固定されず、様々な人々が社会的地位の上昇を図れる状況のことを言う。中国では「社会流動はその社会の開放性を明確に反映している」(本書二三頁)とされるため、「社会流動」の語はしばしば研究上のキーワードとなっている。ただし著者の問題意識の基層にあるのは、唐代が南北朝以来の門閥貴族社会から宋代のような科挙によって士大夫が政治の実権を握る社会への過渡期にある、との認識である。本書は、この過程で藩鎮が果たした役割を解明することを目的とし、研究方法として藩帥やその軍政に携わった武人・文人の出自・経歴を整理・分析する。その

意味で本書は、極めて基礎的な視点に立つ正攻法の藩鎮研究といつてよいだろう。

二

それでは書評に先立ち、本書の全体の構成と内容を確認する。本書は全五二〇頁と大部だが、そのほぼ半分は表などの附録なので、紙幅の関係上、本文部分のみを掲載する。

緒論

第一章 唐五代社会流動的發展趨勢

第二章 “自為一秦”——河朔藩鎮治下的政治・軍事与經濟

第三章 社会流動視野下的“河朔故事”

第四章 河朔藩鎮的“統治階級昇降”

第五章 “北走河朔”的士人——一個重要個案

第六章 “書劍双美”——影響社会流動的因素

余論

緒論では、唐代を貴族制や恩陰による官僚採用方式から科挙への転換が生じた時期、すなわち社会流動性が高まり始めた時期と位置づける。ただし、唐代の科挙はまだ官僚採用の一手段に過ぎなかった。そこで著者は、それ以外に社会的地位を上昇させる手段として藩鎮軍内における文人・武人の採用に注目する。また、本書は数ある唐代藩鎮の中でも河朔三鎮、すなわち魏博・成徳・盧龍の三鎮を主な分析対象

にするが、その理由は河朔が、後に科挙によって社会流動性が高まった北宋と、それに比べて門閥の影響が強かった遼・金との中間地帯という特殊性を有しており、社会流動研究の焦点になるからだとする。

第一章では、魏晋南北朝から遼・宋・金までを視野に、社会流動の全体像を提示し、唐後半期に藩鎮が恩陰とも科挙とも異なる辟召という手段によって人材登用を行ったことを指摘する。併せて、社会流動研究において前提となる社会階層区分を提示し、上層を政治・経済的に影響力を持ち官爵に与った「士族」（もしくは「世族」、下層に部曲や奴婢を置き、中間層として官爵を持たないが平民から豪族までの幅を持つ「凡庶」を置く。

第二章では河朔三鎮の政治・軍事・經濟構造について基礎的な整理を行い、藩鎮軍内の階層区分として、①節度使及び都知兵馬使、都虞候や州刺史、掌書記等から構成される「上層政治精英」（以下、本稿では「上層エリート」と表記）、②それ以外の文武職を持つ者で構成される「中下層政治精英」（以下、本稿では「中下層エリート」と表記）、③何の肩書も持たない「凡庶」を設定する。この区分が第三章以下の分析の基準となる。

第三章では、憲宗以前と以後について、河朔三鎮における藩帥の出自と経歴を分析する。そして、憲宗期以前は藩帥選定の範囲が特定の家族内に限定されていたのに対し、憲宗期以後の魏博や盧龍では藩帥が人脈・才能・品德等を持つ上層エリートから選定されるようになってきたとし、そこに流動性を見出す。ただし、王氏の世襲が固定化した成徳における流動性は、魏博・盧龍に比べると低かった。

第四章では、墓誌なども含めた統計的な情報収集に基づき、河朔地

域の凡庶が藩鎮軍内に登用されていく様相を解明し、凡庶及び中下層エリートが社会上昇を果たすためのルートとして、河朔三鎮における文武の職掌が機能していたと論じる。また、時代を経るごとに凡庶出身で中下層エリートの肩書を持つ者が増えたとし、河朔地域の社会流動性が高まっていったとする。

第五章では、河朔において中下層エリートから上層エリートへの社会的上昇を果たした人物の具体例として「李仲昌墓誌」を取り上げる。李仲昌は昭義節度使元誼の元に仕え、軍乱で彼が軍団から放逐されると彼と共に魏博節度使の元に奔った。元誼は後に藩帥田季安の舅となったが、若年で節度使の地位についた田季安は年長者の多い田氏より姻族の元氏を重視したといい、李仲昌が田季安政権下で州刺史に任じられるなど重用されたのも、かかる政治背景と関連していたと推定する。

第六章では、河朔でエリート層になる条件を分析する。そして、第一に必要とされたのは武芸だったが、さらに上層への上昇を図る場合は文化的素養も必要だったとし、学校の設置等の教育も河朔三鎮の主導で行われたとする。

最後に余論では河朔三鎮のエリート層を、門閥貴族が政治の中枢を占めた唐と、社会流動性が一気に高まった宋との間の断絶を埋めるものと位置づける。河朔三鎮において、藩帥位の世襲は必ずしも固定的では無く、中下層エリートには凡庶の子弟も採用された。後の五代から宋・遼・金においては河朔出身者の活躍が見られるが、こうした趨勢を用意したものが河朔三鎮下での社会流動であったと見做す。

三

以上、本書の内容をまとめてきた。基本的な用語を邦文の研究と対照するならば、上層エリートと中下層エリートは渡邊孝が幕職官の研究で用いた「上級幕職官」「下級幕職官」におおよそ該当しよう（ただし著者の区分では文人だけでなく武人も含む）。また、藩鎮軍内に参入していった「凡庶」は、邦文の諸研究で「在地新興層」と表現されてきた人々に相当すると思われる。

藩鎮の軍構造とその構成員に関わる研究は斯学において最も基礎的かつ重要な研究課題である。その課題に正面から挑み、膨大な史料群を統計的に分析することによって全体の傾向を導き出した著者の力量に敬意を表したい。また本書には、著者の鋭い洞察を示す記述が随所に見られる。例えば著者は序章の中で、藩鎮が唐の天下を乱し亡国の要因となった、という歴史認識が主に宋代人によって形成されていたこと、むしろ藩鎮体制を肯定的に評価する視点も存在したことを明らかにする（二四―三〇頁）。著者の指摘は、概説書等で「後半期の唐は藩鎮の跋扈に悩まされた」或いは「後半期の唐は藩鎮の集合体に過ぎなかった」といった紋切り型のネガティブ・イメージが現在も再生産され続けている根源的な理由を指摘するもので、傾聴すべきである（なお、現在の研究の到達点は、藩鎮体制が唐を支える役割を果たしていたと評価するものである〔新見二〇二〇、一―二頁〕）。

併せて著者は、「河朔の旧事」の形成過程についても丁寧な分析を行っており、朝廷が初めて「河朔の旧事」を認可した記録を、『会昌

一品集』所収「賜何重順詔」であるとする（六四―六七頁）。実はこの点については既に評者も指摘したことがあり、この詔勅が出された武宗期、すなわち八四〇年代こそが、朝廷と河朔三鎮との関係の転換点であると主張した「新見二〇一五、一七―一九頁」。同様の見解は、評者とはほぼ同時期に李碧妍「二〇一五、三六〇―三六三頁」によっても提示された。唐の藩鎮対策という観点では、従来憲宗期が唐室の「中興」を達成したと高く評価されてきたが、一連の研究はむしろ武宗期の重要性を主張するもので、これまでの藩鎮通史に見直しを迫る成果といえる。

また、本書の根幹である社会流動という視座についても、唐後半期の藩鎮が、従来官職に預からなかった人材を登用し、彼らが政治の舞台に立つ前提を用意したという見方は妥当である。科挙以外の官界新出の道として藩鎮下の文武職が重要性であったとする著者の主張（二七二―二七四頁）は、膨大な史料の裏付けに支えられており説得力を持つ。したがって、河朔藩鎮下での社会流動を唐から宋への過渡期中に位置づけるといふ本書の目的は達成されていると言えよう。

ただし、評者としてはその前提たる階層区分に、いささか馴染めないという感も否めない。もちろん著者の主張通り、軍団には上下関係があり、社会的な地位の高低もある。だが、それを分析するからこそ特に留意せねばならないのは、ある人物の軍団内での地位や重要性は、決して彼の役職・肩書のみでは測れない、ということである。

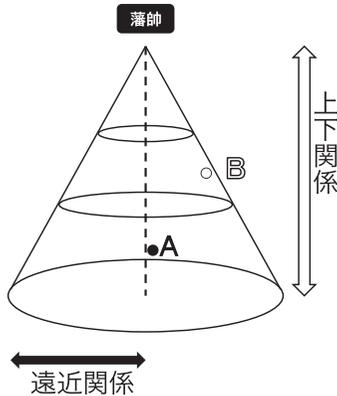
例えば著者は藩鎮軍下で頻出する押衙（押牙）という肩書について、渡邊孝「一九九二」の見解に則り、元々は刺史クラスの比較的上層の者に与えられ、やがてより下層の者にも文武問わず与えられるよ

うになった階層的な加号、と認識する（九九頁）。つまり、藩帥を頂点とするピラミッド状の軍構成を想定するなら、押衙は上層から中下層まで、様々な範囲の武人・文人に付与されたことになり、なんとも取り留めのない印象を受ける。これに対し、押衙とは藩帥の信任の厚さを示す指標、と指摘したのが馮培紅「一九九七、九九―一〇〇頁」である。馮は藩帥を中心に置いた同心円的な人間関係を想定し、押衙はその中心近くに位置する者、と捉えたのである。

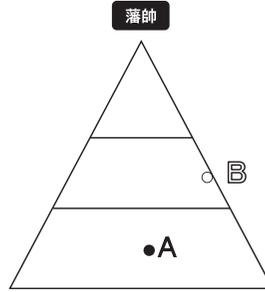
この渡邊と馮の理解は、いずれも文献史料・出土史料の網羅的な分析に立脚しており、共に説得力を持つ。それにも拘わらず、同じ押衙について異なった説明がなされたのは何故か。それは、（おそらく古今東西多くの政権がそうであったように）藩鎮の軍団が平面的ではなく立体的な構造になっているからである。

次頁の【図ア】で示したように、藩鎮の軍団は制度的な地位の高低に基づくピラミッド状の上下関係（白矢印）と、藩帥との人間的・物理的な距離——血縁関係の有無、勤務場所等——に基づく同心円状の遠近関係（黒矢印）とで構成され、軍団の構成員（人物A、人物B）はこの中に空間的に配置される。したがって、【図イ】のように制度的視点で見た場合、人物Aは人物Bより地位が低い。しかし【図ウ】のように人間関係で見た場合、人物Aの方が人物Bよりも権力の中核たる藩帥に近い。つまり、同じ人物であっても視点を変えれば、その重要性が全く異なって見えてくるのである。押衙は、例えば地位が低くても藩帥から個人的に信任された、Aのような人物が冠した肩書と考えられる。

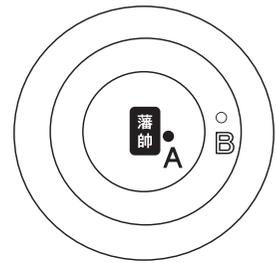
このような立体的な理解は、第五章にある元誼とその部下李仲昌の



【図ア】藩鎮軍構造概念図



【図イ】制度的視点で見た藩鎮軍構造
(先の【図ア】を真横から見た図)



【図ウ】人間関係で見た藩鎮軍構造
(先の【図ア】を真上から見た図)

※人物 A の具体例は、親衛軍として藩帥に近侍した比較若年の兵卒（場合によっては仮子）等であり、人物 B の具体例は、親衛軍の経歴や藩帥との血縁関係を持たず、治府の外に駐屯する軍団を率いたやややん長の武将等である。

事例の分析にも有効だろう。著者は李仲昌が刺史に任じられたのを榮転と捉えており、その認識は正しいと評者も思うが、一方で元誼の子飼いを体よく軍政の中央から遠ざけたとも解釈できる。藩鎮の軍団を階層構造のみで捉えることに評者が違和感を覚える理由はここにある。

また、著者自身も述べているように押衙のような肩書は時期によって地位の下落が見られた。したがって、唐末にかけて多くの凡庶が中下層エリートに参入したように見える理由として、実質的な役職を持たない肩書の増加も検討する必要がある。本書は細かい軍職の分析は行わない方針というが（九九頁）、行論の説得力を増すためには各肩書及び上述した藩鎮の軍構造について、緻密な理解と説明が求められるはずである。

ところで、本書全体と大きく関わる上層エリートと中下層エリートの人的構成、そして彼らと中央政府や在地社会との関連性については、渡邊孝「二〇〇一 A / 二〇〇一 B」の成果が国内外における到達点である。それによれば、上級幕職官と下級幕職官との間には一種の断絶があり、前者が中央官界への進出を目指す科擧合格者等で構成されたのに対し、後者は在地の事情に明るい地元有力者等から成り、双方の人的構成や志向は異なっていたという。これは、社会流動の活性化だけでなくその限界と理由にまで言及した極めて重要な成果である。特に辟召制を唐の貴族制と宋の士大夫制との架橋と安易に見做してきた従来の視点に対する批判は、著者とは立場を異にするように思われる。著者が渡邊の研究を十分把握していることは本書の随所から窺えるからこそ、その成果に積極的に挑戦する姿勢を示しても良かった

たのではないか。

併せて気になったのは、著者が自ら設定した社会流動という概念に捕われすぎていないか、ということである。藩鎮の活動には、本書が主たる考察対象とした藩帥と軍団のみならず、朝廷や在地社会、非漢族、仏教勢力や商人等、様々な人々が関与していた。こうした視座をより積極的に取り入れることによって、著者のいう河朔の「開放性」を一層深く考察できるだろう。今後の展開に期待したい。

以上、本書を通読して評者の感じた点を述べた。浅学な評者ゆえ、誤読や理解の不十分な部分があるかも知れない。行き届かぬ点については、大方の御叱責を請う次第である。著者は今後、中国における唐代藩鎮研究を牽引する人材と目され、本書は研究史の中で必ず参照されるものとなるであろう。また、本書を含め近年の中国学界における藩鎮研究の活性化には、評者も大いに刺激を受けている。今後の日本における藩鎮研究には、その豊富な研究蓄積を踏まえた、総合的な著作が求められよう。

参考文献（著者名五十音順）

- 新見まどか 二〇一五「唐武宗期における劉稹の乱と藩鎮体制の変容」『史学雑誌』一二四―六、一―三七頁。
- 二〇二〇「僖宗期における唐代藩鎮体制の崩壊——黄巢の乱と李克用の乱」『史学雑誌』一二九―九、一―三五頁。
- 馮培紅 一九九七「晚唐五代宋初帰義軍武職軍将研究」鄭炳林（主編）『敦煌帰義軍史專題研究』蘭州大学出版社、九四―一七八頁。
- 李碧妍 二〇一五「危機と重構——唐帝国及其地方諸侯」北京、北京師範大学出版社。
- 渡邊孝 一九九一「唐・五代の藩鎮における押衙について（上）」『社会

文化史学』二八、三三―五五頁。

- 二〇〇一A「唐代藩鎮における下級幕職官について」『中国史学』一一、八三―一〇七頁。
- 二〇〇一B「唐後半期の藩鎮辟召性についての再検討——淮南・浙西藩鎮における幕職官の人的構成などを手がかりに」『東洋史研究』六〇―一、三〇―六八頁。

（大阪大学人文学研究科・助教）